私の感じる空即是色

本間睦実

何もない世界は一体どんな色を帯びているのだろうか。どんな色に包まれているのだろうか。小さい頃からふと気がつくと、いつもそんなことを考えている。

何もない世界をイメージする。少しずつ少しずつ、自分の周りにある存在を消していく。この毎日を彩る生活をなくしていく。私が今座っている椅子、机、教卓や黒板･･･。小さな存在から大きな存在へどんどん範囲を広げ消していく。さらに、この身を包むセーラー服をどこかへ投げ捨てて、私自身もなくしてしまう。地球から何もかもなくした後で、その地球すら存在しないものとしてしまう。そうすると、そこには暗黒物質に満ちた宇宙が広がる。そして、その深い黒色の闇を消してしまおうとするとき、私は疑問をもたずにはいられなくなる。何もない、宇宙すらない世界をつくろうとすると、その空間とは何色なのだろうか。

人に聞くと、それは白色だという。人に聞くと、それは透明なんだという。けれども、どちらもなんだか納得がいかない。白だという発想は、紙の概念からきているのかもしれない。真っ白な画用紙に何かを描いて作品をつくることは、何もない＝白だと思わせてしまう。しかしそこに白色が広がっているのは紙があるからである。紙が白を存在させているのだ。さらに透明についてはどうだろうか。透明ならば、何かその向こう側を通して見える色があるのではないだろうか。そうなると結局、何もない世界なんてつくりようがないのではないのだろうかと思う。

今あるこの世界は、「無」から生まれてきたわけではない。「無」のなかに、それを生むための何かが元々眠っているのだ。何かになるための何か、何にでもなりうる何かがそこにはある。宇宙が何もない状態から生まれたとすれば、その「無」の状態には惑星を生むための何かが存在していたのだ。つまり、何もないということは、何でももっているということだ。何もない度合いが強まれば、可能性の広がりを生む。例えばプリンが、甘くほろ苦いカラメルソースとさよならをしてしまったとしたら、プリンという黄色のつややかボディは、少しの物足りなさとともに、どんなテイストにもなりうる可能性を手に入れるし、何味にも染まらないでいる可能性も手に入れる。

今の自分によくいらいらしたり、悔しくなったりすることがある。世界で困っている人々を映像や書物で知り、「ああいう人たちに何かできないかな。」と思う私のそばには、いつも「あなたなんかに何ができるの？何もできないでしょ？」と言う誰かの声があって、私はその声にひるんでしまう。何もできない自分、何もできることをもっていない自分に怒りすら感じる。しかし逆に考えれば、私は今「何もない世界」にいる十八歳の可能性の魂なのだ。これからの将来に未知の可能性を秘めた「何もない世界」をさまよっていく旅人なのだ。だからたとえ今の自分がもつ能力が、理想より乏しくても、卑屈になったり未来を諦めたりはしない。たとえ今の世界が納得のいかないものであったとしても、世界のこれからに目を背けてはいけないのである。

私たち一人一人には「何もない」という何かが満ちあふれている。そしてその「何もない世界」には、既知の色から誰も知らない色まで、たくさんの色がマーブル模様のように複雑に混じり合い、うごめきあう、とてつもなく大きなエネルギーが、じっと潜んでいるように私には思えるのである。